

9/5 五曜

戦争法強行 1年 9.19 各界から

共闘で反対の力 大きく



料理研究家
枝元なほみさん

戦争法反対だというと、「頭の中が現実を見ないお花畑だ」と言われかねない。戦前のような嫌な空気があります。安倍政権が行ってきた戦争法やTPP（環太平洋連携協定）の推進などに怒り続けていると心と体が壊れそうで必死でバランスをとっています。

日本共産党の志位さんが戦争法廃止のために野党は共闘しようといってくれ、反対する大きな道筋がみえました。野党共闘があったから参院選で11の1人区で勝利できた。なかったらもっと負けていました。敗北があったから、共闘はだめだとするのではなく、でき

たことを認め合い、反対の力を大きくしたい。戦争や格差、貧困を広げる方向に未来はありません。地球を食いつぶし、人を陥落として生きるしかなくなってしまう。生きることはもっと豊かなこと。食えることは人とつながることです。自作の料理を味わいながら憲法を語る「憲法カフェ」を右手弁護士さんとしています。普通にも暮らし人と、キッチンから命を大切にしようとながりたい。腰を据えて草の根のつながりをしようと広げていきたいと思っています。

立憲主義を破壊し、憲法9条を踏みじった安保法制（戦争法）の強行から19日で1年になります。また、日本共産党が立憲主義回復のための「戦争法廃止の国民連合政府」を提案してから1年になります。戦争法廃止、「国民連合政府」実現へ各界の識者の方の談話を紹介します。

一人ひとりが要求を言葉に



同志社大学教授
岡野 八代さん

9・19は、日本政治の大きな転換点を示す日付となるでしょう。この日、私たちは、個人の権利を保障し、その潜在能力が発揮される社会づくりという国家の義務を放棄し、国家のために国民が犠牲となることをよしとする安倍政権の本質を目の当たりにしました。参院選が終わり、安倍首相が選挙の争点にすらしない、自分の権利を守るために市民は、憲法の大切さを訴えなければなりません。つまり、政治に何を望むのかを、一人ひとりの生活のなかから言葉にしていかな

ければなりません。憲法を守れ、という主張を、私たちの生活から生み出していく。改憲勢力のたたかいは、今後どれだけ政治との距離を、市民の生活へと政治を引き寄せる形で狭めていけるかにかかっています。野党共闘はそのための、たたかいです。9・19はあくまで転換点にすぎません。いまからそれを、立憲主義の危機から、民主主義を取り戻すためのチャンスへと変換していく、そのためにさらに、共産党の活動に期待しています。